

大村湾沿岸地域一帯における瓦器椀の再検討

肥前南部型瓦器椀を中心として

柴田 亮

はじめに

11世紀から13世紀代の大村湾沿岸地域は、一定量の貿易陶磁が出土することで知られ、その要因には、大陸に近く日宋貿易の交易ルート上に位置しているという地理的要素が挙げられている（宮崎 1994）。この地域の中でも、東彼杵町に所在する白井川遺跡は貿易陶磁が出土遺物の6割を超える割合で出土することから、複数の研究者が拠点的性格を想定している（大庭 1999、橋本 2003等）が、大村湾沿岸地域についての流通論は、その後深化してこなかった。これには大きく二つの理由があると考えられる。

一つは流通の分析を行う際に、貿易陶磁に依拠しすぎたことである。大村湾沿岸地域で一定量出土する貿易陶磁は、遺跡や遺構の年代推定に有効であっただけでなく、貿易陶磁のもつ外来的性格が我が国での対外貿易活動に関連付けやすかった。また、大陸に近いという長崎県の地理的要素が対外貿易との関係を理解しやすくし、結果的に大村湾沿岸地域を日宋貿易という大きな構造の中に関連づけることを容易にしたのである。しかし、この容易さは、当地域がその貿易構造の中でどのような役割を果たしたのか、あるいはなぜそのような位置づけに至ったのか、といった歴史的背景を考察する視点から遠ざかるという問題点も生じさせてしまったと思われる。

そして、もう一つの問題は在地土器研究に関することである。先述のように、大村湾沿岸地域では在地土器の編年が確立されていないため、遺跡等の分析を行う際の年代的指標は主に貿易陶磁によらざるを得ない。しかし、貿易陶磁が耐久消費財と呼称され、一型式の時期幅が約50年という土師器等の在地土器型式に比べて、やや広く設定してあること（山本信夫編 2000）は周知のことである。また、在地土器研究は時間軸のみならず、地域内の工人集団や地域内での土器の供給圏といったモノの流通の実態を把握するために不可欠であろう。

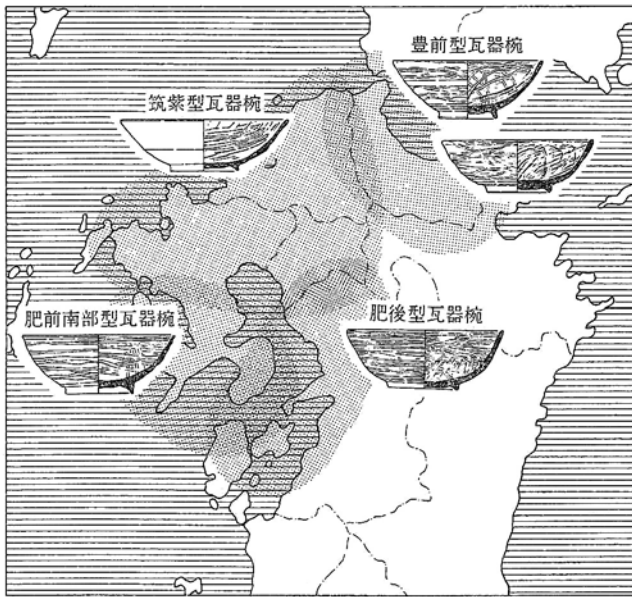
この二つの問題は有機的に関係するもので、両者を解決することでようやく大村湾沿岸地域は、我が国の中世社会における研究の俎上に上がることができると考えられる。そこで本論では、大村湾沿岸地域の在地土器について述べることにしたい。

1. 研究史

前章では大村湾沿岸地域において在地土器研究を行う重要性を述べた。大村湾沿岸地域において瓦器椀については、森隆氏を始めとした（森 1992・1993の等）、研究の蓄積がある。九州地域の瓦器研究については、美濃口雅朗氏によって研究史の概略がまとめられているため（美濃口 2006）、ここでは大村湾沿岸地域の瓦器椀に関する研究史を中心に概観していくことにしたい。

九州系瓦器椀（註1）研究の先駆けとなるのは森田勉氏の論考である。森田勉氏は、九州地方の瓦器椀について、成形技法等から筑前タイプと豊前タイプに大別し、前者は遠賀川流域以西から肥前西部地域まで、後者は遠賀川以東から宇佐地方までの豊前国全域に及ぶと指摘した（森田勉 1995b）。

森田氏の論を踏まえた森氏は、九州系瓦器椀を広域等質型の筑紫型とその他の縁辺在地型と捉え、製作技術から見た広域地域圏と、各属性から見た小地域圏を提示した。この中で、東彼杵郡東彼杵町



第1図 九州系瓦器碗の地域型分布図
(森1992から転載)

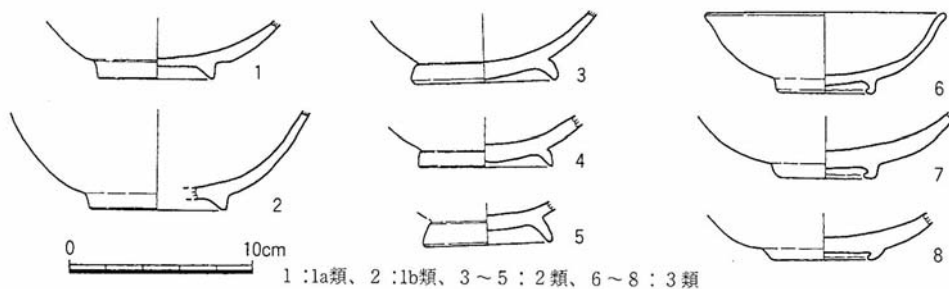
蔵本郷白井川に位置する白井川遺跡を標識遺跡として肥前南部型を抽出し、大村湾から天草諸島北岸まで分布すると述べた(第1図)。肥前南部型の特徴は、①高台径が小さく、体部が内湾気味に大きくひろく深碗基調の器形、②非押し出し技法(註2)、③体部外面のヨコナデの稜線上に、横方向の幅広のヘラミガキを加える点、④カーボンの吸着が平均的である点、⑤内面のヘラミガキに規則性がない点を挙げた。肥前南部型の製作時期については12・13世紀を想定している(森 1992・1993b)。

森田氏が提示した押し出し技法の分布圏にあった西北九州一帯において、肥前南部型は非押し出し技法を用いた型式と考えられていたが、徳永貞紹氏は佐賀平野一帯の瓦器碗について検討し、佐賀平野で出土する肥前南部型に押し出し

し技法の特徴は認められないとしながらも、体部の器形変化点に器壁が厚くなる箇所があることから、肥前南部型は押し出し技法で製作された可能性を指摘した(徳永 1996)。

美濃口氏は、徳永氏の指摘を受けて天草市浜崎遺跡出土の肥前南部型を再検討し、成形に押し出し技法が用いられた可能性を追認している(美濃口 2006)。また、肥前南部型が熊本市陣内上ノ園遺跡からも確認できることから、主に長崎県南西部の沿岸地域を中心として、天草地方や佐賀県南西部、散発的に周辺地域にも分布しており、共伴資料からみて概ね12世紀末～13世紀前半に位置づけられるとした。

筆者は、大村湾沿岸地域の出土遺物を網羅的に計量し、瓦器碗の出土量と肥前南部型の点数を示した。加えて、大村湾沿岸地域に天草型(第2図、註3)が出土することを提示した(柴田 2015)。



第2図 天草型分類図(美濃口 2006から転載)

2．問題の所在と研究の方向性

これまでの研究によって、肥前南部型と天草型の分布範囲や、肥前南部型の成形技法、帰属時期などが指摘されているものの、森氏が指摘するように肥前南部型の型式的特徴については、その系譜関係が明らかになっていない（森 1993b）。また、肥前南部型が出土する地域それぞれにおける、基礎資料の整理が不十分であるため、地域同士の比較検討が困難であることも問題点として挙げられる。

これらの課題を解決していくためには、まず基礎資料を整理することが必要である。筆者は以前、主に大村湾沿岸地域の遺跡を対象として遺物の数量分析を実施したが、対象遺跡の中で、分析に耐える瓦器椀がみられるのは白井川遺跡であった。また、先述のとおり、天草諸島では、浜崎遺跡から肥前南部型が出土したことが知られている。よって、本論では、白井川遺跡と浜崎遺跡の資料を中心に、両地域の検討を行うこととする（註4）。

3．資料の再整理

まず、対象となる遺跡について簡単な概略を述べ、遺物の検討を行う。

白井川遺跡は東彼杵郡蔵本郷に所在する遺跡である。彼杵川の両側は小高い地形になっており、谷地形を彼杵川が流れている。白井川遺跡は、この彼杵川の下流域に位置している。長崎県教育委員会によって調査が行われており、縄文時代から中世期の遺物が出土している（安楽編 1989）。この中で、中世前期の遺物は一定の出土量がみられ、その分析によって複数の研究者が拠点的性格を想定していることは先に述べた。

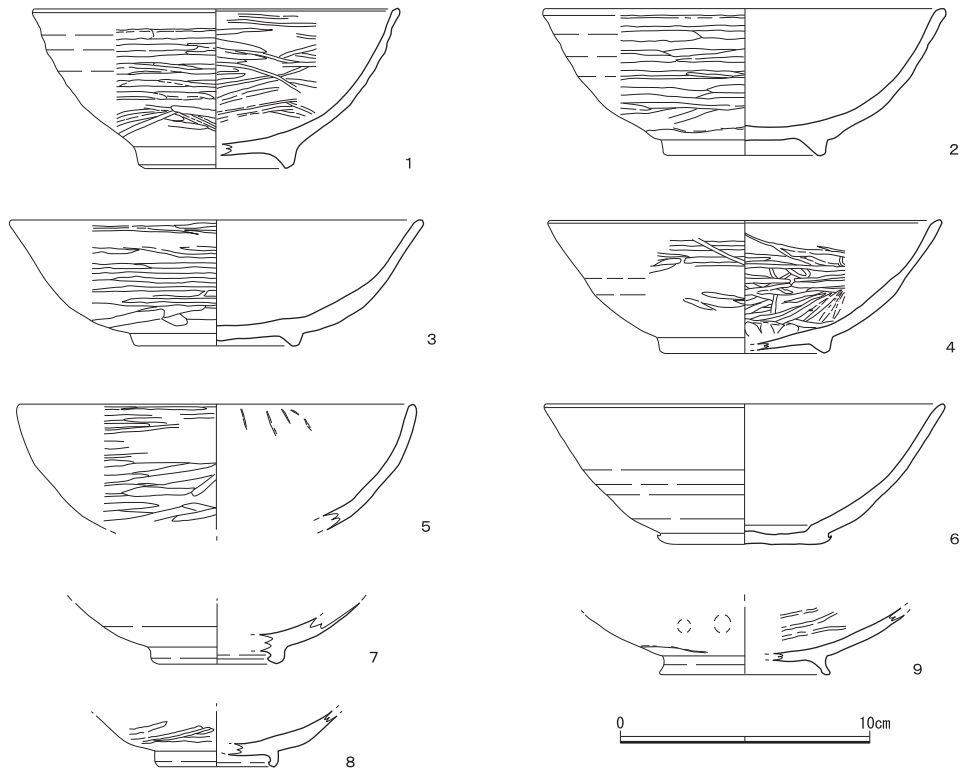
もう一つの浜崎遺跡は、熊本県天草市本渡町に所在する。本渡町は天草諸島のうち、もっとも南部にある下島に位置する。下島を有明海で隔てた北方には島原半島が位置しているが、両者の距離は直線距離でおよそ20^{km}と非常に近いものである。下島の地形は、300～500^m程度の低い山地を中心とした地形であり、山地から流れる川の下流域には、小規模な平野が作られる。浜崎遺跡は、下島の北東部に広がる最も広い平野部の上に立地する。瓦器だけでなく中世前期代の貿易陶磁が一定量出土しており、地域内の拠点的性格が想定されている（平田編 1993）。

a．白井川遺跡（大村湾沿岸地域）

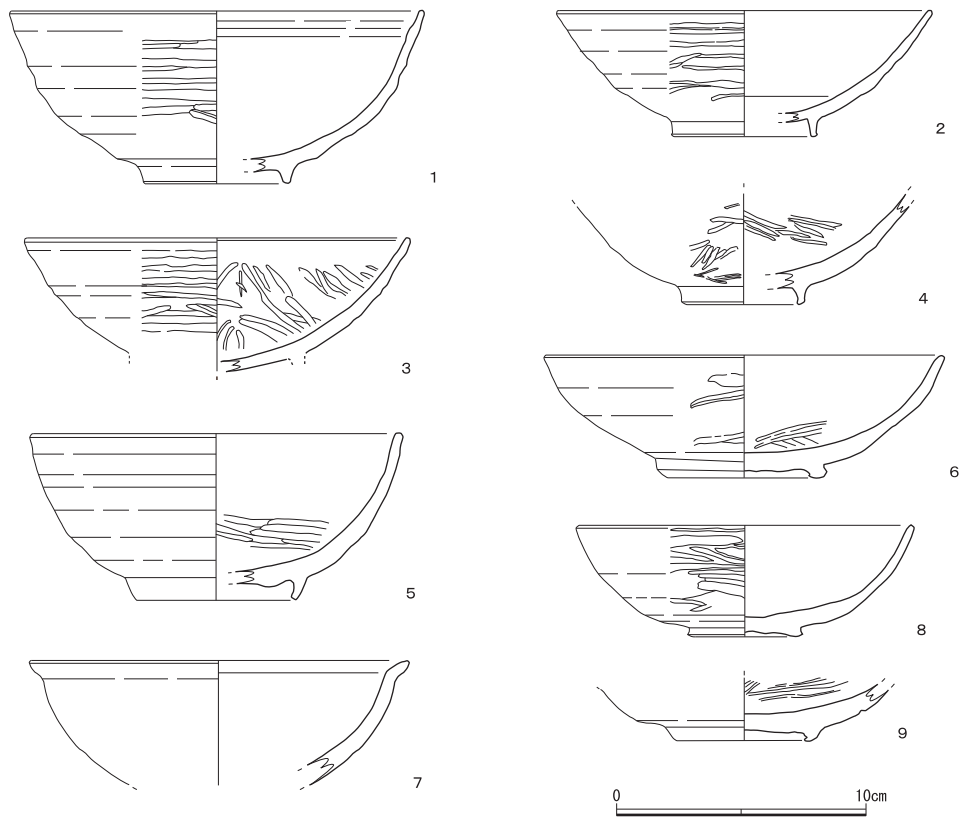
1は、深椀の形状で腰部がやや外側に張り、口縁部に向けて直線的に立ち上がる。体部外面の成形時にできた稜の上に横位のヘラミガキ、体部内面には不定方向のヘラミガキが施される。体部下半は、不定方向のミガキが施される。やや径の小さい高台であり、断面逆台形上を呈し、器壁は薄い。2は、体部外面の稜線上に横位のヘラミガキが施される点において1と共通するが、やや浅椀の形状を呈する。体部中位から緩やかにのびる口縁部であり、外面のミガキの単位がやや大きい。高台は逆三角形形状で、貼付けた後のナデ痕が明瞭に残る。器壁はやや厚く、平均的な厚みであるが、体部中位部分で明確に稜が生まれる箇所が認められる。3は浅椀の形状を呈する。体部下半の器壁が厚く、張り出した腰部から緩やかに外反した口縁部がのびている。体部外面の稜線上に横位のヘラミガキが施されるが、ミガキが密な箇所とそうでない箇所が認められる。体部下半はミガキの単位が大きく、ミガキが荒くなる。高台は低く、断面が逆三角形形状であり、高台内面には糸切り痕が残る。4は、浅椀の形状である。張り出した腰部からやや内湾した口縁部がのびる。体部中位に、明確に器壁が変化する箇所がある。体部外面のヘラミガキはあまり施されていないが、体部内面には不定方向のヘラミガキが密に施される。5は口縁部から体部まで残存する。腰部から体部中位まで器壁が直線的にのび、口縁部にかけて緩やかに内湾する。体部外面にはヘラミガキが施されており、口縁部付近はミガキの幅が細



第3図 肥前南部型瓦器椀・天草型瓦器椀出土遺跡分布図



第4図 白井川遺跡出土瓦器碗実測図 (S = 1/3, 筆者実測トレース)



第5図 浜崎遺跡出土瓦器碗実測図 (S = 1/3, 筆者実測トレース)

く、腰部にかけて次第にミガキの幅が広がる。体部内面のミガキは明瞭でないが、ヘラ状工具を縦位に当てた痕跡が数条残っている。6は、底部が未成形だが器壁の厚みがほぼ均等で、丁寧に作られている。腰部から口縁部にかけて直線的にのび、口縁端部は緩やかに外反する。ヘラミガキは明瞭でなく、炭素の吸着も行われていないが、器形や作りの丁寧さから、瓦器の未製品と想定される。7は須恵質で、高台端部が内側に折り込まれている。明瞭なヘラミガキは見られず、腰部は外側に開く。8も7と同様に高台端部を内側に折り込んでいる。須恵質で腰部に横位のヘラミガキが見られるが、密には施されていない。9は全体的に器壁が薄い。高台形もほかの瓦器碗と異なり、外側に反る細いものであり、体部外面にユビオサエの跡が残る。

b. 浜崎遺跡（天草諸島）

1は深椀状を呈する。体部に成形時にできた稜が顕著にみられる。腰部がやや張り出し、直線的に口縁部へのびる。口縁部内面はツマミナデによって、稜が認められる。体部外面には稜の上に横位のヘラミガキが施されているが、内面のミガキは明瞭ではない。高台形は逆三角形状である。2は器形が1と異なる浅椀状を呈し、腰部から口縁部にかけて直線的にのびている。高台も細く、断面長方形である。体部外面の稜の上に横位のヘラミガキを施すが、ミガキの数が少ない。内面のミガキは明瞭でない。3は浅椀状を呈する。腰部がやや丸みをもって張り、直線的に口縁部へのびている。体部外面は稜の上に横位のヘラミガキが施され、体部内面には斜位のヘラミガキがやや間隔を空けて施されている。4は腰部が外に張り出している。口縁部は残存していない。器壁が厚いが、高台は細く断面長方形を呈する。体部外面のヘラミガキは不定方向でミガキの数も少ない。体部内面も同様にヘラミガキの数は少ないが、方向は斜位である程度統一されている。5は深椀状を呈する。器壁が全体的に厚くぼってりとしており、特に内面見込みから腰部にかけて顕著である。口唇部も丸みを帯びた形状であり、口縁部付近も体部とほぼ器壁の厚みが変わらない。ミガキは少ないが内面に横位のものがやや認められる。高台は内側にやや入り込んでおり、器壁に比べると薄い。6は浅椀状であり、体部中位の器壁が薄くなっている。高台は潰れたような形状で非常に低い。ヘラミガキも粗雑で全体的に作りが悪い。7は口縁部から体部まで残存している。口縁部がくの字状に折れて外反している。8は浅椀状を呈する。見込みから腰部の器壁が厚く、腰部が外に張り出している。体部中位が細くなり、口縁部にかけて直線的に立ち上がる。体部外面にはヘラミガキが施されるが、ミガキの幅がやや広く方向も一定でない。底部は、高台が明瞭に作られておらず、非常に低い。9は、底部から腰部が残存している。底部は非常に低く、高台が内側に折り込まれている。体部外面のヘラミガキは明瞭ではないが、体部内面は横位のヘラミガキがやや施されている。

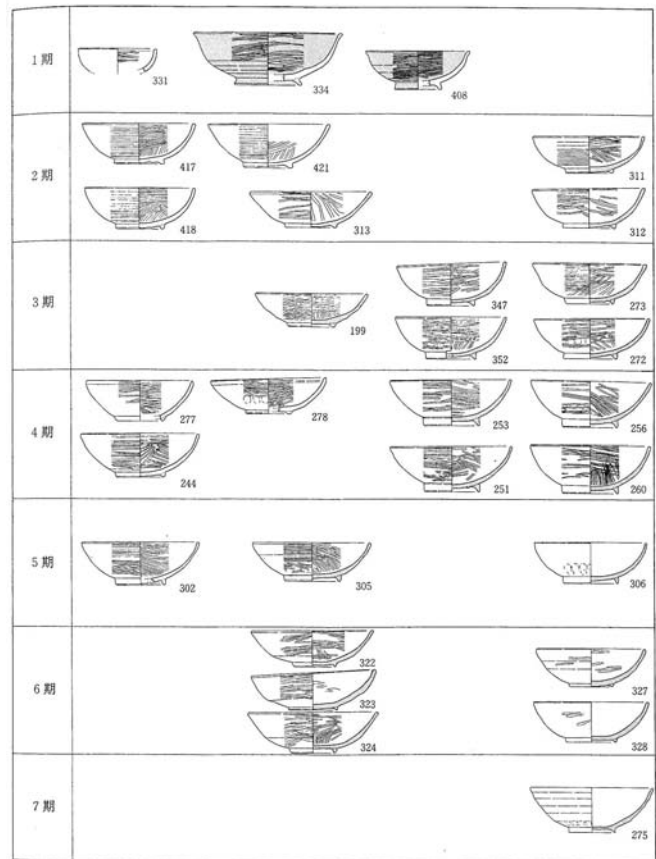
c. 考察

肥前南部型と考えられる個体は白井川遺跡で第4図1～3、浜崎遺跡では第5図1～3といえる。白井川遺跡出土瓦器碗全体を見ると、深椀タイプ(1,2)と浅椀タイプ(3)のものが認められるが、肥前南部型でもその2種類が認められる。浜崎遺跡でも深椀タイプ(1)と浅椀タイプ(2,3)が認められるが、浜崎遺跡の肥前南部型のうち浅椀タイプのものは、白井川遺跡のものと比較して腰部が張り出さず、直線的に口縁部まで伸びている。また、底部形態についても、浅椀タイプのものは細く断面長方形の高台であり、白井川遺跡出土の瓦器のように、断面逆三角形とはならない。両地域の肥前南部型を比較すると、体部外面の稜線上に施される横位のヘラミガキは共通するが、器形や底部形態などは共通点が認められない。この要因には、森氏が提唱したような瓦器碗の伝播していく過程に

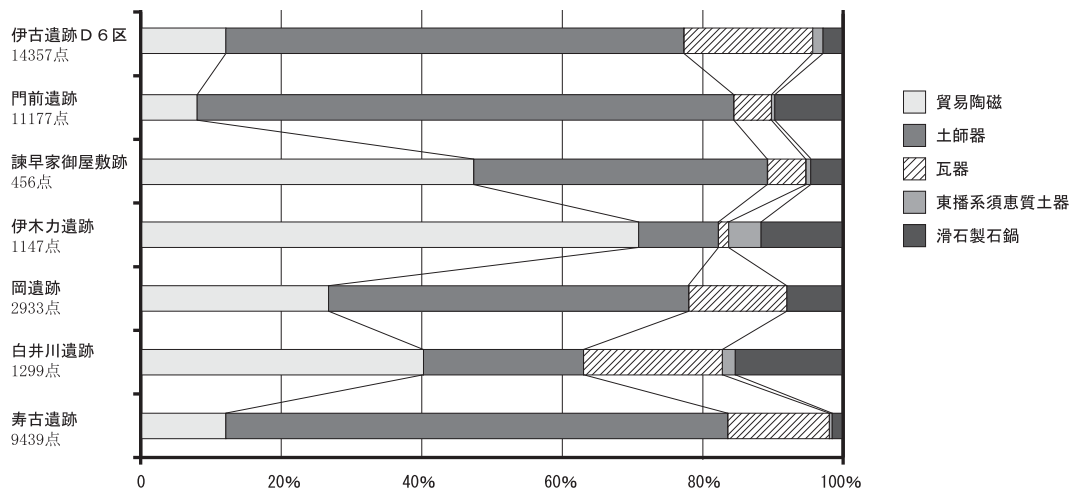
あると考えられる。

まずは肥前南部型の発現した場所について検討してみたい。肥前南部型が出土する地域では、大村湾沿岸地域や天草諸島のほかに、熊本平野（註5）や佐賀平野・武雄盆地があげられる（徳永 1991, 1996）。徳永氏によれば、佐賀平野の瓦器碗には大きく分けて深碗・浅碗の2種類があり、技術的、形態的变化によって7期に分けられている。時期については、11世紀末に出現し14世紀前半まで存続するとしている（徳永 1991, 第6図）。近年の研究で、九州系瓦器碗の製作は在来の土師器碗の技法を援用したという評価で定まってきており、器形的な系譜関係は、各地域によって異なっている。佐賀平野では瓦器碗の祖型は華南産白磁碗に求められ、瓦器が独自に発展したと理解されており（徳永 1991）、量的にも卓越している。これに対して、大村湾沿岸地域での瓦器碗は全体の遺物量に対しての割合が概ね20%と低く（第7図, 註6）、量的に卓越していたとは考え難い。肥前南部型が大村湾沿岸地域で生まれたと考えるより、佐賀平野・武雄盆地一帯で発現した肥前南部型が大村湾沿岸地域に伝わったと考えた方が、蓋然性が高いと思われる。加えて、大村湾沿岸地域では、瓦器の前身に当たる、黒色土器の出土量も、全体的に希薄であることも、この裏づけになると考えられる（註7）。

瓦器碗の製作技術自体が大村湾沿岸地域に伝わった時期は明確でないが、先述のように浜崎遺跡出土の肥前南部型は共伴遺物から12世紀末～13世紀初頭に位置付けられている（美濃口 2006）。この12世紀末～13世紀初頭は、大村湾沿岸地域の流通構造が貿易陶磁の間接入手期（11世紀中頃～12世紀後半以降）から、在地勢力による直接入手期（13世紀代）へ変化する時期（柴田 2015）に近いことは重要であり、在地勢力の活動の活発化を背景として肥前南部型が大村湾沿岸地域に伝わった可能性が考えられる。天草型3類が大村湾沿岸地域から出土することも、在地勢力の活動の一端がうかがえる資料である。また、大村湾沿岸地域と天草諸島の肥前南部型に見られる器形や高台形のバラつきは、地域内の変動期に一時的に肥前南部型の製作技術が伝わったものの、製作した集団が在地の工人であったため、横位のヘラミガキなど特定の技術以外は在地的な製作技法によった結果と捉えることができる。大村湾沿岸地域で出土する瓦器碗のうち、肥前南部型の点数が限定的である点（第1表）も、肥前南部型が一時的に流入したものであることを補強する。



第6図 佐賀平野の筑紫型瓦器碗編年図
（徳永 1991から転載）



門前遺跡は杉原 2009の集計表の数値を，伊古遺跡は貿易陶磁と滑石製石鍋以外は報告書の数値を，岡遺跡は報告書の数値を援用している。

第7図 大村湾沿岸地域の遺物の比率（初出柴田 2015）

表1 大村湾沿岸地域一帯の瓦器椀計量結果（初出柴田 2015）

分類	器種	白井川遺跡		寿古遺跡		諫早家御屋敷跡		伊木力遺跡		伊古遺跡	
		点数	重量 / g	点数	重量 / g	点数	重量 / g	点数	重量 / g	点数	重量 / g
肥前南部型	椀	18	256	2	16					8	59
	皿										
天草型	椀	3	30	6	63	1	21			2	50
畿内系	椀	3	34								
	皿	1	15								
	不明										
畿内系模倣	椀									1	101
分類不明	椀	225	1393	1091	5712	24	392	17	84		
	皿	6	45	41	190						
	不明			224	2131						
総計		256	1773	1364	8112	25	413	17	84	11	210

4. 結論

これまでの検討から，次のことが指摘できた。1. 肥前南部型は佐賀平野・武雄盆地一帯で発現し，大村湾沿岸地域，天草諸島に伝わった可能性が高い。2. 大村湾沿岸地域，天草諸島の肥前南部型は，横位のヘラミガキ技法が共通するものの，器形，口縁部・底部形態は共通点が少なく，肥前南部型の出土量も少ない。3. 2の理由には，大村湾内の流通構造が変化した際の，在地勢力の活動の活発化が想定でき，肥前南部型は一過的に大村湾沿岸地域や天草諸島へ伝わった可能性が高いと考えられる。

以上，大村湾沿岸地域一帯の瓦器椀について検討を行った。今後は，佐賀平野・武雄盆地の瓦器椀と大村湾沿岸地域・天草諸島の瓦器椀の比較検討や，松浦地方・島原半島といった周辺地域の瓦器椀の検討を行い，西北九州における在地土器の様相をさらに把握していく必要があると考えられる。

謝辞

本論の執筆に際して、美濃口雅朗氏には瓦器椀について様々な御教示を賜っただけでなく、本論の細部にわたり、御指導をいただきました。資料の閲覧に関して、白井川遺跡については東彼杵町歴史民俗資料館の皆様が格別の御配慮をいただきました。浜崎遺跡については中山圭氏の御厚意により中世期の資料全般を閲覧する機会をいただき、本渡市歴史民俗資料館の皆様からも多岐に渡って御高配を賜りました。末筆ながら御協力をいただいた皆様に御礼を申し上げます。

【註】

- 註1 森氏の名称に準じて、九州地方の瓦器椀は、「九州系瓦器椀」と呼称する。また、型式名称として使用する場合は、他の文献から引用する場合などをのぞいて、「肥前南部型」のように瓦器椀を省略した呼び方を行う。
- 註2 押し出し技法は森田 1995a にて提示された、九州系瓦器椀の基本的製作技法である。一部異なる地域はあるものの、九州系瓦器椀に共通する製作技法である。
- 註3 天草型は森隆氏、及び平田豊弘氏によって設定された（森 1993b、平田編 1993）。天草型は1類：断面三角形を呈する高めの高台が付き、体部下半にヘラケズリを施すもの、2類：須恵質であり、外側へ開いた高めの高台が付くもの、3類：高台を内側に折り込むもの、の3種類に大別されている。美濃口氏は天草型瓦器椀の再検討を行い、1類：腰部に稜を形成するもの（a類）としないもの（b類）が認められる、2類：体部下半にヘラケズリされる個体が認められる、3類：高台の折り込みは意識的なものであり一定量確認できる。体部外面は回転ヘラケズリが認められ、体部と底部の境が確認されることから、押し出し技法による成形と判断され、基本的な成形技法は肥後型瓦器椀と共通する、との指摘を行った。時期に関しては、共伴する遺物から12世紀末～13世紀前半頃と推定し、その系譜関係は高台の形状から、南部九州産の黒色土器A類・土師器椀を想定している（美濃口 2006）。
- 註4 実測図を掲載した遺物は、出土した資料をすべて閲覧し、良好に残っているものを選別した。なお、両遺跡とも出土した瓦器椀は細片が多く、実測に耐えうる遺物が非常に少なかったことを記しておく。
- 註5 熊本平野における肥前南部型は、散発的な出土であるため、今回は検討に含めていない。
- 註6 遺物の計量結果は柴田2015に提示している。
- 註7 美濃口氏の御教示による。また、美濃口氏から、肥前南部型特有の横位のヘラミガキが生まれた背景には、経年によるミガキの簡素化が想定される、との御教示をいただいた。筆者はまだ、佐賀平野、武雄盆地一帯の肥前南部型を実見していないため、この御指摘については対象資料の実見後、別稿にて論じることとした。

【引用・参考文献】

論文

- 大庭康時 1999「集散地としての博多」『日本史研究』448号 日本史研究会 pp.67-101
- 柴田 亮 2015「考古学的視点から見た肥前西部地域の流通構造」『考古学研究』第62巻第1号 考古学研究会 pp.44-62
- 徳永貞紹 1991「IV 総括 2、本村遺跡出土遺物の位置付け」『本村遺跡』佐賀県文化財調査報告書台102集 佐賀県教育委員会 pp.146-154
- 徳永貞紹 1996「佐賀平野の瓦器椀にみる中世土器生産の一様相」『中近世土器の基礎研究X I 日本中世土器研究会』pp.183-200
- 橋本久和 2003「九州出土の畿内産瓦器椀ノート」『中近世土器の基礎研究X VII 日本中世土器研究会』pp.69-95
- 橋本久和 2009『中世考古学と地域・流通』真陽社
- 美濃口雅朗 2006「九州における瓦器椀研究の成果と課題」『中近世土器の基礎研究X X 日本中世土器研究会』pp.67-95
- 宮崎貴夫 1994「長崎県における貿易陶磁研究の現状と課題 主に県本土地域を中心として」『長崎県の考古学 中・近世研究特集』長崎県考古学会 pp.79-97
- 森 隆 1992「中世土器の生産にみる地域型の提唱と工人集団の系譜について 西日本の土器椀生産を中心とした」『中近世土器の基礎研究VIII 日本中世土器研究会』pp.3-54
- 森 隆 1993a「土器椀の生産と流通」『中近世土器の基礎研究IX 日本中世土器研究会』pp.169-186

- 森 隆 1993b 「北部九州の瓦器生産」『古文化談叢』第30集(中) 九州古文化研究会 pp.665-698
- 森田 勉 1995a (初出 1977) 「大宰府出土の土師器に関する覚え書き(2)」『大宰府陶磁器研究 森田勉氏遺稿集』 森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会 pp.31-35
- 森田 勉 1995b (初出 1984) 「筑前型瓦器椀の成立過程」『大宰府陶磁器研究 森田勉氏遺稿集』 森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会 pp.63-70

報告書

- 安楽勉編 1989 『白井川遺跡 彼杵中央地区圃場整備事業にかかる調査』長崎県東彼杵町教育委員会
- 平田豊弘編 1993 『浜崎遺跡』熊本県本渡市文化財調査報告書第6集 熊本県本渡市教育委員会
- 山本信夫編 2000 『大宰府条坊跡XV 陶磁器分類編』大宰府教育委員会